



下商物語

校歌について

教諭 林 俊行

本校創立二十五周年(明治四十二年)に作られた校歌は、我が国の校歌の中ではかなり古いもので、「歴史に富める下関 未来に富める下関」と、歌い継がれておよそ一世紀となります。おそらく、日本全国に校歌は沢山あるでしょうが、これほど短い歌詞にもかかわらず実に味わい深く歌いやすいものは、そうざらにはないと思います。

本校創立二十五周年(明治四十二年)に担当され、その後数々の校歌を手がけられたそうです。佐佐木先生は、明治五年に生まれ昭和三十八年に他界されるまで、優れた和歌・童謡・唱歌などを世に残されています。「夏は来ぬ」などは、その代表作です。

ただし、もともとの校歌の歌詞は、本校が名池山校舎の時代であったので一番は、「一目に望む名池山 ここに築きしわが校舎」となっており、現在の千畳原に移って来た時に「一目に望む千畳原の丘に築きしわが校舎」と改められたそうです。ですから、大正時代までの卒業と昭和になつてからの卒業生の方々が歌われる

時は、歌詞が違っていた(左下資料参照)とのことです。

次に、作曲は「上 真行(うえ・さねみち)」先生で、我が国を代表する雅楽家として、明治から昭和の初期にかけて大活躍をされた方です。昭和十二年に他界されるまで、「年の始めのためしとて」、「出た出た月が」、「白地に赤く日の丸染めて」、「あれ松虫が鳴いている」、「我は海の子白波の」などを世に残されています。

さらには、創立七十年(昭和二十九年)の記念事業の一つとして、「海行かば」などを作曲された当時、我が国を代表する作曲界の大御所であった「信時 潔(のぶと き・きよし)」先生の手によって原曲に伴奏・二部合唱・混声での編曲がなされました。

このように、本校の校歌は当時の我が国を代表する実に素晴らしい人々の手によって作られ、約一世紀にわたって下商生の精神の指針として、未永く先輩から後輩へと歌い継がれています。平成七年の夏の甲子園大会で二回戦に勝ち残り、大応援団(生徒・教職員・卒業生など)でナイター設備のもとで大いに歌った「下商校歌」を近いうちにもう一度大声で歌ってみたいものですね。

